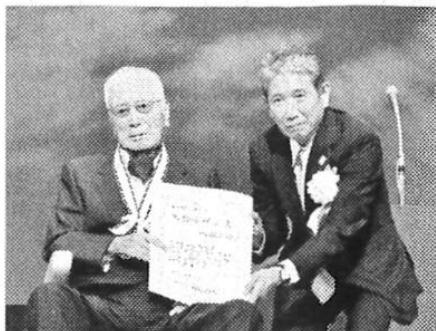


深く地域に関わり尽力



戸田市の名誉市民第一号に選ばれた中村会長(左)と神保国男市長(右)。昨年10月、戸田市文化会館

戸田町は日本の高度経済成長に乗り人口が急増し、1966(昭和41)年、5万人を超えて戸田市となつた。東京都のベッドタウンとなり、それ以降も人口は勢いよく増えしていく。

戸田中央病院も市の発展に合わせるように総合病院へ。何度もベッド数を増床するなどして規模を拡大し、市民の医療ニーズに対応してきた。戸田中央医科グループ(MG)となつた現在、埼玉県を中心とした首都圏に28の病院と6カ所の老人保健施設などを展開するまでに成長を遂げた。

隆俊はこの間、警察や消防関連、ロータリークラブなどでも深く地域に

玉崎新聞

2人は夕張炭鉱からの朝鮮人逃亡者だった。戦時下のことで、警察や特高警察の追求は予想されたが、父母は「夜更けまで話し合い、家族同様に扱つて、一緒に生活しよ

朝雲流れて
金色に照り

**戸田中央医科グループ創設者
中村 隆俊の半生**

関わり、尽力。その積み重ねは昨年、戸田市名誉市民第1号という形で返ってきた。

隆俊にはロータリークラブに関して忘れられない思い出がある。北大医学部に入学し、札幌で生活を始めた44(昭和19)

年ころのことだ。北極山の実家では、戦時下の統制で本業の穀物取引ができないなり、父末吉と母ヨシノは従業員を養つた。年下駄の製造をしていた。

そんな中村家に、ぼろを着た見知らぬ青年2人が訪れた。「働かせてほしい」。

「戦争によつて朝鮮から強制的に連れてこられた夕張炭鉱で働くされている人がいるという話を聞いていたので、ピンと感ずるものがあつた」と、末吉は自身の回想録「北海に燃える」に書いている。

「う」という結論に達した。隆俊は、父母の「う」ところに北海道人らしいおおらかな気概を感じる。

昨年、名誉市民第1号に

【第8話】

父母は2人に千秋と三郎という日本名を与え、町長や警察署長の「見て見ぬふり」にも助けられ、2人を無事終戦まで保護した。終戦の翌年の46(昭和21)年、2人は帰国。一家は函館港で青函連絡船に乗る2人を見送った。2人は母の肩に手を置いてむせび泣き、父母も泣いた。

それから約30年後、隆俊は戸田ロータリークラブの国際奉仕委員長として74(昭和49)年4月、韓国の水原ロータリークラブと姉妹提携を結んだ。前年8月に金大中事件があり日韓関係は良くはなかつたが、ロータリー仲間の「近くで遠い国と提携したい」という思いが結実した。

隆俊にとつては、かつて家族で守つた朝鮮人青年への友情を織り込み、民族や国境の壁を越えた父母の深いヒューマニズムを受け継いだ提携だつた。2青年との再会を願つた母ヨシノは56(昭和31)年2月、53歳で他界し、父末吉も81(昭和56)年2月、82歳で没した。

2人とも残念ながら2青年との再会はかなわなかつた。 (敬称略)

火曜日に掲載